

学道一如

発行
小樽双葉高校
生徒会通信
2024年12月5日
第49号

木村花音さん クラシック音楽コンクール サククスで全国9位に

11月27日、第34回日本クラシック音楽コンクールが東京都葛飾シムフォニーホールで開催され、木村花音さん（3-2）がサククス部門に出場し、9位に入った。

演奏したのはドゥメルスマンのファンタジー。2年生のときに演奏したことがあり、暗譜で臨んだ。ピアノ伴奏の谷津祐子先生から、この一年、ご指導を受けながら共に演奏してきた。この大会が「集大成」となった。全国からの30余名の出場者は

レベルが高く、「すごく緊張したが、練習の成果は発揮できた」という。審査員4名の中には大好きなサククス奏者の住谷美帆さんがいて、感激したという。全国で9位に入る活躍だったが、高いレベルの演奏に触れ、更なる研鑽を誓っている。



左からピアノ伴奏の谷津祐子先生、木村花音さん、水澤大地先生。



京都のにしん蕎麦、鮭フレークご飯、菜味の昆布、富山のおぼろ昆布のおにぎり。その地域の産物ではない、北前船の遺産だ。

蝦夷地の関連商品としては①海産物（ニシン、サケ、マス、コンブ、ナマコ、アワビ、タラ、クジラ、魚肥、魚油、オットセイ、ラッコ皮、アザラシ皮、トド皮など）②陸産物（クマ皮、テン皮、キツネ皮、タヌキ皮、シカ皮、リス皮、熊胆、ワシ羽、シイタケ、オクリカンキリ、木材など）③アイヌ工芸品（アットウシ、テトラペ、細工物）④サンタン交易品（蝦夷錦、ガラス玉など）がある。

北前船が小樽の発展に貢献
北前船の定義は諸説あるが、18〜19世紀、本州に拠点をもち、日本海を主な活躍の場として、北方地域を往復した商船を指す。

石川県の神社ではイナウ（アイヌ民族の祭具）の奉納額が複数見つかった。また、アットウシ（木の皮の衣服）が土産物として重んじられていたことが錦絵などから想像される。

蝦夷地から運ばれたもの

小樽再発見⑬

北前船の軌跡

10月5日から連続講座「北海道の自然・歴史が形作った小樽を考える」（似鳥文化財団主催）が小樽芸術村で開催されている。第3回は「日本史の中で蝦夷地（北海道）から運ばれたものが果たした役割」と題し、菅原慶郎氏（東京理科大学 教養教育研究院）が講演された。18〜19世紀の北海道から運ばれた商品がどのように流通したのか、現在にもつながる興味深い内容だった。

アイヌ民族の狩猟文化伝わる
蝦夷地の産品は慶応年間（1865〜68年）では、ニシン（72%）、コンブ（9%）、サケ（9%）が大半を占めていた。小樽市西部のタカシマ・オシヨロではナマコ、アワビなどの海産物、クマ（熊胆・毛皮）、カワウソ、キツネの皮などの軽物が取引されていたが、アイヌ民族が狩猟を担っていたと考えられる。

ウルフ島のラッコもアイヌ民族が捕獲し、高価な珍品として長崎から輸出された。



講師の中井理依さん

新聞を高校新聞に活かすワークショップ

11月9日（土）、北海商科大学（札幌市豊平区）に石狩・後志管内高文連加盟高校の新聞部局員が集まり、新聞専門部第3回合同研究会が開催された。当会は高校間の交流、各校の新聞作成能力の向上、支部活動の活性化を目指している。

この日は午前中は石狩・後志支部総会が行われ、各校の現状報告や全道大会の反省、次年度への引き継ぎなどが話し合われた。

午後からは北海道新聞社みらい教育推進室の中井理依次長から高校新聞に新聞を活かす方法についての講演を聞き、グループでワークショップを行った。実際にその日の北海道新聞の記事を参考に新聞づくりを話し合った。バスや列車の遅延の現状と課題、雪虫の発生、インフルエンザの流行などをテーマに新聞を作るアイデアが発表された。

【感想】中井さんのお話やグループワークを通じて、自分にはなかった考えに気付くことができ視野が広がった。この経験を今後活かしてゆきたいと思います。（落合優翔）